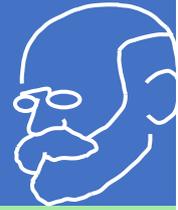


基盤研究 (B)

社会学のディシプリン再生と デュルケーム



目次

●第1回全体研究会の報告	1
●活動報告	7
●連載 玩味玩読デュルケームのことば 第2回	8
●本科研メンバーによる関連業績	10
●お知らせ・今後の活動	10
●本科研の概要(再掲)	11
●クロニクル	12

News Letter
vol.2
2016.1

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究(B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

第1回全体研究会の報告

本科研の第1回全体研究会(デュルケーム/デュルケーム学派研究会の第31回研究会と共催)を下記のとおり実施しました。第2部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時: 2015年10月10日(土) 13:00~17:30
- 場所: 奈良女子大学 生環系E棟 107室(奈良市北魚屋西町)
- 参加者: 30名(本科研メンバー以外の参加者も含む)
- プログラム: 第1部 自由報告 (13:30~15:00)

飯田剛史(大谷大学)

「9.11 テロからイラク戦争へ——「集合意識」による解明・試論」

コメンテーター: 林大造(神戸大学)

司会: 江頭大蔵(広島大学)

第2部 デュルケーム解釈に関するミニシンポジウム (15:15~17:30)

江頭大蔵(広島大学) 『『自殺論』の解釈史』

岡崎宏樹(神戸学院大学) 「バタイユのデュルケーム解釈」

中島道男(奈良女子大学) 「バウマンのデュルケーム解釈」

白鳥義彦(神戸大学) 「パーソンズに対するデュルケームの影響」

横山寿世理(聖学院大学) 「アルヴァックスに対するデュルケームの影響」

司会: 小川伸彦(奈良女子大学)

『自殺論』の解釈史 — A. ギデンズの場合
江頭大蔵（広島大学）

『社会学的方法の規準』は、社会学の研究对象と方法論を明確化してディシプリンの確立をめざすものであり、『自殺論』はその方法を自殺現象に適用して有効性をアピールするものであった。ギデンズは早期から『自殺論』や自殺研究に関心を寄せ、社会学的方法論の文脈でその意義について検討している。彼によると、『自殺論』で示された自殺と他の様々な社会的要因との関係は当時すでに周知のものであり、同書の革新性は、自殺の問題を個人心理学から完全に切り離し、社会的自殺率の分布を「社会構造」的要因（自己本位主義、集団本位主義、アノミー）によって説明したことである。

デュルケームの死後、自立的ディシプリンとしての社会学の立場と、それに対抗する心理学・精神医学の立場の論者との間で、自殺の原因が「社会的」か「心理的・生物学的」かをめぐる論争が展開された。しかし、これは誤って立てられた「疑似問題」であり、実際には個人と社会の間には常に「相互依存関係(reciprocity)」がある。そこでギデンズは、「デュルケームが想定した自殺率を規定する構造的変数は、自殺的パーソナリティの形成と分布に影響する変数と分離することはできない」との立場から、社会構造の問題が直接自殺率に影響するだけでなく、社会化の過程でパーソナリティの形成にも影響するという理論モデルを考案する。そしてその背景には、「パーソナリティと社会構造の間の緊密で複雑な相互依存」という構造化理論につながる発想があった。

後年ギデンズは、構造化理論の構築に関連する文脈においては特に、個人に対して「外在的」で「拘束的」とされる社会的事実の「一面性」を厳しく批判する傾向にある。しかしこの社会的事実の特性は、デュルケームが社会学を生物学や心理学から分節化するために考案した分析的な属性であった。現代ではもはや社会学が生物学や心理学に還元されることはないであろうが、構造化理論的な「総合」は同時に、他の学問分野に対する社会学の分節化の契機をも考案すべきなのかもしれない。報告では、日本社会において経済的指標と強い関係を持つ自殺率について、社会的要因を分離して解析する必要性についても検討した。

バタイユのデュルケーム解釈

岡崎宏樹（神戸学院大学）

1937年、ジョルジュ・バタイユは、R.カイヨワ、M.レリス、P.クロソフスキーらと「社会学研究会 le Collège de Sociologie」を結成した。社会学研究会は、デュルケーム学派の宗教社会学の成果に着目しつつも、「未開社会の構造分析」に限定されたこの学派の仕事を、さらに「現代社会」の分析に活用しようとした。カイヨワは戦争を「現代の祭り」として考察し、バタイユはファシズムの熱狂において指導者が聖化される構造を分析した。このように現代の「聖」を学問的に研究する一方で、バタイユは、秘密結社アセファルを結成し、聖なる共同体の創設を試みた。これらの活動は数年で閉じられることになるが、聖という主題に対するバタイユの関心は終生失われることなく、思索はさらに深化してゆく。

そのことは、晩期『宗教の理論』の参照文献に、デュルケームの『宗教生活の原初形態』があげられていることにも示されている。ここでバタイユは「今日、エミール・デュルケームは不当に貶められているように思われる。私も彼の学説からは遠ざかるけれども、その本質部分を維持しないでそうするわけにはいかない」（『宗教の理論』）と述べている。「本質部分」とは、聖への関心であろう。ただし、バタイユは、個人を超えた次元に「社会」を設定したデュルケームの枠組み（個人意識／集合意識）からは遠ざかる。バタイユが設定するのは「非連続性／連続性」という別の枠組みである。両理論の違いは、デュルケームが、宗教や祝祭を、主として社会秩序の創造や活性化の観点から論じるのに対し、バタイユが自我や社会秩序の無化や解体の契機に注目して論じる点によく表れている。バタイユによれば、宗教や祝祭が探求するのは「強烈な生の瞬間」であって、「社会的紐帯を創設する」という目的は「二次的な関心でしかない」のである（『文学と悪』）。

デュルケームは集団の高揚状態を「集合的沸騰」の概念で論じた。一方、バタイユは、「生命の沸騰として表出された過剰エネルギーの運動」を考察する「普遍経済学」を展開した（『呪われた部分』）。ここでは、モースの贈与論（ポトラッチ）も、生命エネルギーの「消尽」の問題として解釈されている。

バタイユは、デュルケーム学派の仕事に接近しつつも、学問分野（ディシプリン）の枠を超えて独自の思想を展開した。社会学の訓練（ディシプリン）を受けていないこの「作家」のことを社会学者とよぶことはできないが、その思考が社会学理論をさらに豊かにする重要な洞察を含んでいることは確かであろう。

バウマンのデュルケーム解釈

中島道男（奈良女子大学）

バウマンは、社会学における道徳論のチャンピオンとしてのデュルケームに対峙し、道徳的＝社会的にとらえるデュルケームのロジックでは、ホロコースト批判ができないと批判している——「社会の規則を破らなかった人々に不道徳という非難は可能なのか」、と。彼は、「個人を道徳化する力としての社会」ととらえるデュルケームに対して、「個人の道徳性を沈黙させる力としての社会」という考えを対置する。社会化のプロセスは道徳的能力の操縦にこそあるのであって、その生産にあるのではない、と。そして、ポストモダニティとしての現代においてはこの個人の道徳性が開花する条件が整った、と主張するのがバウマンのポストモダニティ論である。

バウマンのデュルケーム批判は通俗的であり、反論可能といえなくはない。可能態としての社会に依拠していることを考えれば、デュルケーム的視座は社会の倫理的システムに批判的なまなざしを向けることができないわけではけっしてないからである。とはいえ、バウマンがモダニティ／ポストモダニティの落差——のちに、ソリッド・モダニティ／リキッド・モダニティの対比へと変化——を指摘していることの意義を、受けとめなければならない。

デュルケームはディシプリンとしての社会学の根拠を一種独特の实在としての社会——社会の魂としての社会理想——に求めたが、現代ではもはやこれが成立し得なくなっているのではないか。——ホロコーストをモダニティと関連づけるバウマンの議論におけるデュルケーム批判のメッセージは、ここにある。視点は社会から個人に移行させられているのである。

では、そのとき、社会学というディシプリンの根拠はどこに求められるのだろうか？ディシプリンの再生という課題に関連づけて、若干の展望をしておこう。

ラトウールは、タルドからインスピレーションを得つつ、actor-network-theory を提唱している。社会ではなく個人が重視され、sociology of the social から sociology of the association への移行が主張されるのである。このとき、デュルケームの論敵であったタルドの掘り起こしもたしかに有意義ではあるが、ラトウール自身も sociology of the association の系譜に位置づけているガーフィンケルに焦点をあてて、デュルケームからガーフィンケルへの流れを検討することも大いに意義があろう。ガーフィンケルはパーソンズの学生でありながら師に批判的であり、しかもデュルケームに自らの源流をみていた。デュルケームからガーフィンケルへの流れは、デュルケーム／タルドとは違って、デュルケームが現代において孕んでいる可能性を、道徳論というデュルケーム社会学のど真ん中で探るのにふさわしいのではないか。バウマンのデュルケーム批判の趣旨を活かすひとつの途がここにあるといえよう。

パーソンズに対するデュルケームの影響

白鳥義彦（神戸大学）

本報告では、タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造—第3分冊デュルケーム論』を題材として、パーソンズに対するデュルケームの影響を検討した。

報告では本書での論点をいくつか取り上げて紹介、検討した。パーソンズは、ホブズ問題に関わり、功利主義批判の文脈でデュルケームが同じ問題を論じていたとし、デュルケームによる契約の非契約的要素への注目や、個人と社会との関係への着目を指摘する。また、社会的事実の外在性と拘束性について、これが環境的、行動主義的なものか、規範的なものか、という問いも提起する。アノミー論から敷衍される快樂の限界効用という観点から、「幸福」の理論という視点も示す。科学と倫理、学問の実践性について、「実証科学はただ人間生活をよくするための手段となりうる限りにおいて正当化されるのである」と、デュルケームが学問の倫理性、実践性、有用性を強調していたと述べる。さらに、デュルケームが経験的研究、モノグラフを著したとして評価し、先行研究について、従来デュルケームが方法論に傾斜して読まれてきたと批判する（「デュルケームは、哲学者あるいは弁証家であって、経験科学者ではないといった結論を導き出してはならない。事実は全く逆であって、かれはその当時の最も偉大な経験科学者の一人であった。……デュルケームは、『非現実的な』空間で理論化を試みたり、『怠惰な思弁』にふけることなく、つねに決定的に重要な経験的問題の解決をめざしていたのであり、まさに科学的理論家そのものであった」）。

本書の特色は、学説史的研究の基盤上に、「主意主義的行為理論」という新たな理論学説の提起を行った点にあるが、こうした観点からすると、パーソンズ自らの理論を展開するために、デュルケームを「利用」しているとも考えられる。そのため、デュルケームの議論を持ち上げておいて、「だが」というような形で、その上で批判するという論調も少なからず見られ、表面的に議論を追っていくと、パーソンズがデュルケームを評価しているのかいないのか、両義的に見える側面もある。とはいえ、パーソンズは自分の理論を導くためであるとしても、デュルケームをよく読みこんでいるのは事実である。

パーソンズは、デュルケームによる研究の、モノグラフとしての意義を繰り返し強調しているが、これはシカゴ学派に典型的に見られるような、経験的研究を重視する当時のアメリカ社会学の文脈の中での、自らの研究の正当化を示すという側面もあったのだろうか。また、例えば、パーソンズによる医療、大学、専門職論といったモノグラフ的研究に見られるような、自らの問題関心の一傾向を示すものとしてもとらえられないだろうか。

全体として本書では、主意主義的行為理論の導出ということが主たる文脈となっており、構造（機能）主義、全体論的なマクロな視点、といったような、デュルケームからパーソンズへの影響といった文脈において通俗的に考えられ得るような観点は必ずしも強調されているわけではないということも、今回再読してあらためて感じたところである。

アルヴァックスに対するデュルケームの影響

横山寿世理（聖学院大学）

デュルケーム学派のアルヴァックス（M. Halbwachs）が論じた「集合的記憶」からは、ベルクソンの記憶論への批判を超えて、デュルケームの集合意識もしくは集合表象からの影響を受けていることが読み取れる。そこで、本報告では、そのアルヴァックスに対するデュルケームの影響について取り上げた。

アルヴァックスは、ほぼ忘れてしまったような過去の思い出を他者の記憶に助けられて思い出すが、「集合的記憶」であると言う。集団内部の視点や、思い出の類似性が集合的記憶を説明するが、この視点と類似性はどこで担保されているのか。本報告では、集合的記憶の「時間的枠」（cadre temporel）と「空間的枠」（cadre spatial）によって、集団内部の視点や過去の類似性が担保されると考えた。

たとえば家族という集団は夫婦からはじまり、子どもの誕生、子どもの独立によって集団を変化させ、そこに流れる社会的時間を変化させる。この場合の社会的時間が「時間的枠」である。アルヴァックスは、夫婦独自の生活リズムは、やがて子どもを中心とした生活リズムに吸収されるのではなく、並んで新しい生活リズムが存続する、と説明する。家族に関する思い出は「時間的枠」によって再構成され、「空間的枠」によって保存される。つまり、まず家族の生活は「時間的枠」（日付や時期など）によって想起され、その後、継続する空間的なイメージを持って保存されるということになる。

このように持続する時間を日付によって区切ることは、ベルクソンの「持続」と対比される「時間の空間化」に他ならない。アルヴァックスは、ベルクソンの「持続」を批判しており、むしろ「時間の空間化」を経て、過去を「空間的枠」に転回しようとしていると考えられる。

なぜアルヴァックスは時間の空間化を選んだのか。アルヴァックスはベルクソンの「持続」を他者と共有するために、デュルケームの「集合表象」を要請する。アルヴァックスは「持続」を否定しているのではなく、ベルクソンの「持続」を、「時間の天文学的区分や日付」という集合表象に重ねることで「時間の空間化」を生じさせ、社会に委ねていることになる。

ここから、アルヴァックスは「私」という個人の外にいる他の人びとも共通する集合的な状態から社会的事実を取り出そうとしていると論じた。

活動報告

● A班（起源説明チーム）第1回研究会

日 時：2015年9月14日(月) 13:30～17:00

場 所：和歌山大学 教育学部5階第2教室（和歌山県和歌山市）

出席者：5名

内 容：テーマは当初の方針どおり『社会学的方法の規準』成立とその周辺」としました。プログラムは、①「Les règles de la méthode sociologique 新訳における訳語の変更について」（菊谷和宏）、②「経済学史からみたデュルケーム社会学」（吉本惣一）、③『社会学年報』を中心としたデュルケーム学派と形而上学者たちとの論戦」（太田健児）の各報告に対して、「ベルクソンからみたデュルケーム社会学」（小関彩子）、「タルドからみたデュルケーム社会学」（池田祥英）を対置させるかたちで進められました。報告①では、「規準」の原語である règles の語義、訳語としての「基準」と「規準」との違い、これ以外の訳語の可能性について、contrainte についても同様の問題提起がなされ、いくつかの新訳語のアイデアが出されました。報告②では、経済学史の中にデュルケームがどう位置づけられるか、デュルケーム自身の経済学へのアクセスの検証可能性について意見が交わされ、現代フランスの経済学史研究やその著作群も紹介されました。報告③では『社会学年報』誌上のデュルケミアンと形而上学者たちとの議論が検証され、<<positif>>や<<sociologie>>などの「当時の“実相”」の解明こそ社会学のディシプリン化の起源説明に繋がることが確認されました。

次回はベルクソン、タルドとデュルケームとの交錯模様の詳細説明も視野に入れた内容を予定しています。（太田健児 記）

● B班（解釈史検討チーム）第1回班別会議

日 時：2015年9月27日（日）10:30～12:00

場 所：キャンパスプラザ京都 第2会議室（京都市下京区）

出席者：7名

内 容：各メンバーが研究の方向性と進捗状況について報告した後、B班の研究が〈社会学のディシプリン再生〉という主題に対し、どのような意義を持ちうるのかについて検討し、これを通じて、今後の研究で特に重要となるのは以下3点であるとの見通しを立てました。すなわち、①デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、②社会的なものが不透明化・不確実化する現代において、〈社会の生成〉をどう理論化するかという点に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、③批判的継承の中で失われたものや、非明示的な形で継承された問題意識と思考方法に着目し、後代の研究をとらえかえすことです。（岡崎宏樹 記）

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。

周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。今回は、〈道徳〉概念をめぐるデュルケームの言葉に注目しました。本科研費研究の申請を後押ししてくださった故大野道邦先生、来年度より正式に本科研メンバーに加わる山田陽子氏、そして研究協力者の金瑛氏が選んだ「ことば」を掲載します。

※ 訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.4●

遊びが肉体的生活の美学であり、芸術が知的生活の美学であると同様に、この独自の活動は道徳生活の美学なのである。

<<De même que le jeu est l'esthétique de la vie physique, l'art, l'esthétique de la vie intellectuelle, cette activité *sui generis* est l'esthétique de la vie morale.>>

【ミニ解説】

ここで、デュルケームが「独自の活動」としているのは、唯心論的哲学者・道徳学者のポール・ジャネ(Paul Janet, 1823-1899)というところの「美的工夫」あるいは「道徳的工夫」(belles inventions ou invention morale)である。ジャネによれば、道徳的行為には、「道徳律」そのものに厳格に従う強制的な側面のみならず、個別的・具体的な状況に応じた「個人的創意」の側面もある。この後者の側面は、芸術における創意工夫のように道徳における創意工夫

ということができる。たとえば、「祖国へ献身せよ」や「平和のために戦え」という抽象的かつ一般的な道徳的命令は、個々のひとびとの——とりわけ歴史上の政治家や市民、聖者や英雄の——銅像や箴言や詩歌や旋律などの表現や工夫によって具体化され彩色される。これは、デュルケーム流にいえば、「道徳的力の自由な発露(le libre déploiement de force morale)」であり、美学の領域に属するがそれ自体特有の「表現方式」である。道徳は、厳格かつ固定的な義務に服従する側面のみならず、個人の自由かつ柔軟な創意工夫によって創られ生(活)そのものを魅力的な潤いで充たすような審美的表現の側面も含むのである。(なお、大野道邦「モラルと表現——デュルケームにおける『倫理的文化』の可能性」、大野道邦・中島道男『現代における社会構想の可能性——デュルケームとバウマン』平成13年度奈良女子大学プロジェクト報告書, 2002: 23-36も参照のこと)。(大野道邦 記)

【キーワード】

道徳、美学、創意工夫

【出典】 *Textes 2: Religion, morale, anomie*, Présentation de Victor Karady, 1975 (Minuit p. 282)

[事務局註:『社会分業論』の「第1版序文」からの引用。『社会分業論』の「第1版序文」は第2版以降では削除されているので、デュルケーム『テキスト』(カラディ編)第2巻に収められている「第1版序文」の抜粋からの引用となっている。]

(邦訳)『社会分業論』青木書店、田原音和訳、1970年、420頁

●ことばんごう no.5●

つまり、自殺は、われわれの道德のすべての基礎をなしている人格尊重の精神を傷つけるために非難されるというわけである。

<<Le suicide est donc réprouvé parce qu'il déroge à ce culte pour la personne humaine sur lequel repose toute notre morale.>>

【キーワード】

自殺、道德、人格崇拜

【出典】 *Le Suicide: étude de sociologie*, 1897 (Félix Alcan 版 p.379)

(邦訳)『自殺論』中公文庫、宮島喬訳、1985年、421頁

●ことばんごう no.6●

道德を教えるとは、道德を説教して頭に叩き込むことではない。それは、道德を説き明かすことなのである。

<<Enseigner la morale, ce n'est pas la prêcher, ce n'est pas l'inculquer : c'est l'expliquer.>>

【キーワード】

規律の精神、社会集団への愛着、自律の精神

【出典】 *L'éducation morale*, [1925]2012 (Quadrige/Presses Universitaires de France 版 p.122)

(邦訳)『道德教育論』講談社学術文庫、麻生誠・山村健訳、2010年、215頁

【ミニ解説】

『自殺論』といえば自殺の諸類型として知られるが、デュルケームは人格崇拜という道德との関連でも自殺を考えていた。デュルケームは、歴史上、様々な社会で自殺がどのように道德的に評価され、その根拠が何であったかを探りながら、近代化の中で自殺が厳禁されていく理由を解明する。自殺は個人に宿る神聖な性質を侵犯するがゆえに、嫌悪をもたらす。

(山田陽子 記)

【ミニ解説】

デュルケームは、道德性の本質的な要素として、規律の精神、社会集団への愛着、意志の自律性の三つを挙げた。人が道德的に振る舞うためには、規律や愛着といった道德感情によって個人が拘束されているだけでは十分ではない。デュルケームはカントを念頭に置きながら、自律性がなければ、道德は受動的な服従に墮すると論じている。それは宗教的道德の枠内にとどまる道德であり、世俗化の進

んだ社会においては、自律性に基づく道德こそが重要となる。このような道德は、規則の根拠や存在理由を説き明かす「道德の科学」によって可能になる、というのが『道德教育論』における彼の主張である。「道德を説教して頭に叩き込む」ことが声高に叫ばれがちな現代社会において、「道德を説き明かす」という別のあり方を追究するデュルケームの姿勢から学ぶことは多い。

(金瑛 記)

本科研メンバーによる関連業績

●本科研メンバーによる関連業績を紹介します。

(2015年発表分のうち事務局で把握しているもの／著者名の50音順)

- * 飯田剛史、2015、「9/11同時多発テロからイラク戦争への米政策・マスコミ・世論の動態過程——「集合意識」による解明・試論」『大谷大学研究年報』第67集（大谷学会発行）、pp.1-33
- * 岡崎宏樹、2015、「リズム論的思考(1)——社会学とクラークスのリズム論」『Becoming』No.34（BC出版）、pp.98-132
- * 岡崎宏樹、2015、「社会学と哲学——パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学学会年報』第26号、pp.69-90*
- * 菊谷和宏、2015、『「社会」のない国、日本——ドレフュス事件・大逆事件と荷風の悲嘆』講談社
- * 白鳥義彦、2015、「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム——現代との応答」『日仏社会学学会年報』第26号、pp.91-104*
- * 中島道男、2015、「デュルケームの「国家—中間集団—個人」プロブレマティーク」『日仏社会学学会年報』第26号、pp.47-67*

備考：*を付した論文は『日仏社会学学会年報』第26号（2015年）の特集2「古典と現代——社会学におけるデュルケーム学派の今日的意義」に所載。

お知らせ・今後の活動

●D班第1回班別研究会

本科研メンバー向け

- 日 時： 2016年2月7日（日）
場 所： 神戸大学（兵庫県神戸市）
内 容： 事例紹介（社会学教育におけるデュルケーム・デュルケーム学派について）・研究動向の整理（「特集・社会学教育の現代的変容」を読む（『社会学評論』Vol.58(2007-2008)No.4）等）、および班の活動内容の確認

●第2回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催）

- 日 時： 2016年4月16日（土）午後
場 所： 文京学院大学（本郷キャンパス）B館408教室（東京都文京区向丘）
内 容： 本科研費研究関連としては、「社会学的方法の規準成立の“周辺”」というテーマの発表が予定されています。詳細が決定しましたらデュルケーム／デュルケーム学派研究会HP（<http://homepage3.nifty.com/fjosh/durkheimian/>）に掲載いたします。

備考：参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。

デュルケーム科研推進事務局 durkheim2017@gmail.com

※ 研究会の内容は一部変更される場合もあります

●研究課題名

社会学のディシプリン再生はいかにして可能か
——デュルケーム社会学を事例として

●研究代表者 中島道男（奈良女子大学）

●研究分担者 15名（平成27年度）

●研究種目と期間 基盤研究B（15H03409）
平成27（2015）年度～平成30（2018）年度

●研究概要

本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、次の4つの角度から社会的ディシプリンの成立・変容のプロセスを解明し、現代社会学のディシプリン再生に必要な知見を明らかにすることを旨とするものである。

● 研究推進の4つの柱と研究分担者一覧

*ディシプリンの成立過程

多種多様な“sociologie”論が存在するなか、デュルケーム学派がどのようにして制度的な「社会学」を成立させたのかを考察し、隣接諸学との分節化のプロセスを解明する。

◆主に起源解明チーム（A班）が担当＝太田健児 [班長]（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（和歌山大学経済学部教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）

*ディシプリンの継承・変容

デュルケーム社会学が後代にどのように解釈・批判・継承されたかを、社会学内外の議論を視野に入れて多面的に検討し、ディシプリン変容の過程を明らかにする

◆主に解釈史検討チーム（B班）が担当＝岡崎宏樹 [班長]（神戸学院大学現代社会学部教授）／中島道男（奈良女子大学大学院人文科学系教授） [研究代表者]／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学部教授）／飯田剛史（大谷大学文学部特任教授）／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）

*各国の学説受容と教育化

デュルケームの学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって追究し、学説受容と社会・文化的条件の関係性およびアメリカ社会学の影響を明らかにする

◆主に国際比較チーム（C班）が担当＝藤吉圭二 [班長]（追手門学院大学社会学部教授）／林大造（神戸大学キャリアセンター学術研究員）／中倉智徳（立命館大学衣笠総合研究機構研究員）

*社会学教育法の開発

理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査するとともに、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組む

◆主に社会学教育チーム（D班）が担当＝白鳥義彦 [班長]（神戸大学大学院人文学部教授）／小川伸彦（奈良女子大学大学院人文科学系教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）
※ 28年度より研究分担者就任予定

さらに13名の研究協力者が参加（次頁）

● 研究協力者一覧（50音順）

安達智史	近畿大学総合社会学部 講師
池田祥英	北海道教育大学函館校 特任准教授
梅澤精	新潟産業大学経済学部 教授
荻野昌弘	関西学院大学社会学部 教授
笠木丈	フランス国立社会科学高等研究院 博士課程
川本彩花	京都大学学際融合教育研究推進センター 研究員
金瑛	甲南女子大学 非常勤講師
杉谷武信	日本大学文理学部社会学科 非常勤講師
速水（小島）奈名子	神戸大学大学院人文学研究科 研究員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター センター長
村田賀依子	奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部 非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学大学院国際社会科学研究院 研究員

クロニクル 2015年4月～2016年1月

- | | |
|---|---|
| ● 5/26(火) 国際学会発表に向けての準備会（大阪市）
参加者5名 | ● 9/27(日) B班第1回班別会議（詳細は本号 p.7） |
| ● 6/2(火) 大野道邦先生ご逝去（享年73） | ● 10/10(土) 第1回全体研究会（詳細は本号 pp.1-6） |
| ● 6/4(木) 部内報創刊号配信 | ● 10/11(日) 第1回国際シンポジウム企画会議
（奈良市）参加者12名 |
| ● 7/2(木) 部内報第2号配信 | ● 10/15(木) 部内報第5号配信 |
| ● 7/15(水) ニュースレター創刊号発行 | ● 11/5(木) 部内報第6号配信 |
| ● 7/20(月) デュルケーム命題集第1回編集委員会
（広島市）参加者5名 | ● 12/3(木) 部内報第7号配信 |
| ● 8/6(木) 部内報第3号配信 | ● 1/7(木) 部内報第8号配信 |
| ● 9/3(木) 部内報第4号配信 | ● 1/9(土) B班第2回班別会議（詳細は次号） |
| ● 9/14(月) A班第1回研究会（詳細は本号 p.7） | ● 1/10(日) 第2回国際シンポジウム企画会議
（京都市）参加者7名 |

編集後記

ニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第2号をお届けします。今号では主に、2015年7月以降の研究活動の報告を掲載しました。10月には第1回全体研究会を開催し、その他、随時班別の研究会をおこなっています。次号では、4月の第2回全体研究会の様態などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第2号

発行日：2016年1月15日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部

中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com